

## 日本で外国語を教えて 50 年

### Fifty years in Japan learning how speech is assimilated (1967-2017)

クロード・ロベルジュ  
Claude ROBERGE

In order to prepare myself to teach French at Sophia University, I was granted a period of two years study. For me, there was no hesitation I had to go to Paris for that purpose. This happened at the beginning of 1963. I had gone to the main schools that were offered in Paris for this purpose, Sorbonne, Hautes Etudes, Alliance Française and one year and half of my almost time had elapsed. On one side, I was happy, I could be so French everyday my mother tongue, I was in the city of dream for the french canadian that I was. But yet something was missing. And one day, it was in April 1964, I read in the daily newspaper “Le Monde” that there would be a course of one month in Besançon near the Swiss border on a new method for teaching French, I immediately applied and accepted. When I arrived in Besançon, I noticed there were 200 participants like myself mostly French veteran teachers of that language in different countries of the world and four or five Japanese. My surprise was that the teachers for phonetics, or speech correction were not French but Yugoslavian as they were called at that time. They became later on Croatsians. I immediately friended with them. They told me that unfortunately their great master was not with them but he will be attended another seminar that will take place four month later in the Island of Ponza. I applied for this second course. That was a seminar where I met Professor Petar Guberina. My life as a teacher of French language would never be the same.....

## 1. サバティカル教育でパリへ

イエズス会の任務命令により上智大学外国語学部でフランス語教育に携わるようになった。外国語を学ぶ上で発音は重要であると考えていたが、日本人学生に正しいフランス語の発音を身につけさせる効果的な方法を見出す事ができず悩んでいた時期に、幸いにも2年間のサバティカル教育が認められパリに行くことになった。

フランス系カナダ人としてパリに行くことは喜びであった。パリの外国人のための専門学校でフランス語の先生のための講座や、ソルボンヌ大学での講座。ベルナルデン通りの音声研究所の講座にも参加したが、筆者の求めるものではなかった。

6月のある日のこと、ルモンド誌を購入、ブザンソンでフランス語講習会の開催広告記事が掲載されていた。大学や専門学校等での講座に満足できなかったこともあり、ブザンソンの講習会に申込みを行い、参加が認められた。

6月に開催されたブザンソンの講習会には、フランス語専攻の大学院生や大学教授が世界各国から集まり200人程度参加していた。フランス語の音声学についてはユーゴスラビアの教授がフランス語の発音矯正指導の講座を担当されていた。その講座に参加し、フランス語の緊張度、リズム、イントネーション、隣接音、それらの要素を身体運動に連携させ、理論的に整然と一つにまとめあげたユーゴスラビアの方式に衝撃を受けるとともに、日本人学生に正しいフランス語の発音指導に適用すれば効果が上がるのではと感じていた筆者に、ユーゴスラビアの教授の一人が「9月にイタリアのカプリ島近くのポンザ島に本方式の提唱者であるグベリナ教授が来られる」と筆者に話しかけてくれた。しかしながら、当時、ユーゴスラビアの方式はヨーロッパでも認知されている指導法でないこともありポンザ島行きに悩んだが、折角の機会でもありポンザ島（ピラトがエルサレム総統になる前にいた島であり、ムソリーニが戦犯で逮捕されて幽閉されたが、島から逃亡してローマで処刑された）に行くことにした。ポンザ島の7、8月の避暑や海岸近くの高級ホテルは賑わっていたが、9月は閑散期であり、講習会の開催には適していた。

講座ではイタリア人のフランス語教授、フランス人の教授、グベリナ教授が担当されていた。グベリナ教授から筆者にザブレブに来るようにとの

誘いがあった。当時のユーゴスラビアは共産国でキリスト教に理解がないのではと一抹の不安があったが、グベリナ教授のメソッドに惹かれる面が強いことと ①ザブレブで聴覚障害や言語障害の学生（日本人の新入学生と同じ）がどういう教育を受けているか？ そのための最適な音声の教育設備・機械があること。②上智大学でのフランス語教育の方針を決める。などがあり迷いに迷っていたが、12月初めに、ユーゴスラビア大使館からビザが発給され、3週間滞在することになった<sup>1</sup>。

ザブレブには2人（男女）の日本人がおられ、男性はベオグラードでセルビア・クロアシア語を、女性は声楽を勉強していた。その二人が日本語の最適性（最適性とは、母音や子音についてどのようにして聞き分けているのか、聞き比べしてみると最適な母音と子音の音声周波数があること。）のヒントを与えてくれた。そこではグベリナ先生のメソッドを用いて聴覚・言語障害者の言語教育をしていた。当時、筆者は聴覚・言語障害児の教育に興味を持っていなかった。

12月、10年ぶりにカナダに帰国し家族とクリスマスを祝い、翌年2月頃日本に戻った。

## 2. 研修の成果を活かして

研修で習得したグベリナ教授の教えであるフランス語を母国語として  
いる人の言語矯正メソッドは、日本人の初学生には直接参考にならない。  
1967年4月からフランス語の教育が始まるため、フランス語学科の学生  
にフランス語らしくフランス語を話してもらいたいとの想いで、具体的に  
学生対象にフランス語をどのように教えたらいいのか悩んでいた。

フランス語教育の準備をしている3月のある時に、居室の空間の中で、  
目や手を動かしてフランス語がどこにあるか探していた。そして、急に腕  
を伸ばしてみると、フランス語のリズムに合っていると直感した。研修時  
にパリで購入したフランス語のわらべうたの本<sup>2</sup>を無意識に開いたところ、

1 クロード・ロベルジュ、ヴェルボートナル・システムに基づく発音矯正、上智大学外国語学部紀要第1号、1967、pp.123-136。

2 Beaucomont, Jean. Guibat, Frank. Tante Lucile. Pinon, Roger. Soupault, Philippe. Les comptines de langue française, Paris :Seghers, 1970, p.145.

「Bibi Loro」のわらべうたがあり、その歌詞を独唱した時、自然に腕を胸の前で廻して、最後に腕を横に広げ手先を伸ばす動きを入れて発声するとフランス語のリズム感が腕の動きで表し得ることを体験した。フランス語学科の新生にとってフランス語を感じ取ることが重要であることを自覚していたため、どのように身体の動きを使えばいいか思案していた時に、筆者の腕が自然に前述の動きとなった。この動きを用いれば学生にとって分かりやすいのではと直感した。

実際に初講義の時に、説明なしで筆者の「Bibi Loro」独唱と腕の動きに合わせ、学生に復唱させ、腕の動きや手の動きを一人ひとりチェックして、発声に合わせて練習をさせるとそのリズムがフランス語らしく聞こえてきた。学生達は戸惑いながらも体の動きで、自らの発音がフランス語らしくなってきたことに喜びを感じ取ったことから、この指導法が初学生にとって効果があることを確証した。

一方、筆者は1956年で初めて日本語を習ったが、フランス語のリズムとは異なり日本語のリズムには自信を持てなかった経験がある。日本語はフランス語と比較すると緊張はほとんどなく、日本人は挨拶をする時に頭を下げるが欧米人は頭を下げることはない。電話でも頭を下げる動きは日本人の特徴的な動きである。

このようにフランス語と日本語ではリズム感が異なるため、フランス語圏の子供がメロディーなしで身体を動かして唄えるわらべうた（ナーサリーライム、フランス語ではコンティーンヌ *comptine*）をフランス語学科新生に適用し、フランス語のリズム感を育成することにした。

年々異なったナーサリーライム（わらべうた）や、シャンソン（童謡）を取り上げ、1クラスを4つのグループに分け学生指揮の下、強弱を付けて発声させ、輪唱をさせると学生の声は徐々に大きくなり、身体を動かすことによりフランス語らしく聞こえるようになってきたことから、グベリナ教授が提唱する「ことばの音は身体の動きから生じる」の指導方法をフランス語学科新生に適用したことは自然の流れと云える。

### 3.1. ナーサリーライム（わらべうた）によるフランス語学科学生のリズム感の教育

まず、フランス語圏で広く知られている代表的なわらべうた<sup>2</sup>を例にと

り説明する。

(1)

Une poule / sur un mur  
 Qui picotait / du pain dur,  
 Picoti, / picota  
 Lève la patte, / puis s'en va.

フランス語のアクセントは、日本語や英語とは異なり単語ごとに決まっているのではなく、語やリズムグループの最終音節の強さと長さにより特徴づけられる。本節ではアクセントのある音節を強拍、ない音節を弱拍と呼び、強拍の母音を下線で示す。上記わらべうたには各行に4つの強拍があり、2つ目の強拍の後に短い休止を(/)で示した。行末に長い休止が入る。Une, du のような普通のフランス語ではアクセントがないはずの箇所もリズムを整えるため、ここでは強拍となっている。また4つの行の語尾は同じ韻になるようになっており、自然に子供が身体の動きでリズムを感じ、しかも各行が「起・承・転・結」の構造となっているため、まとまりのあるナーサリーライム（わらべうた）である<sup>3</sup>。

次のわらべうたは(1)より広く親しまれていないが、交互に現れる弱拍・強拍の繰り返しがりズミカルで覚えやすいものである。

(2)

1- Bibi / Lolo  
 2- De Saint- / Melo  
 3- Qui tue / sa femme  
 4- A coups de / couteau

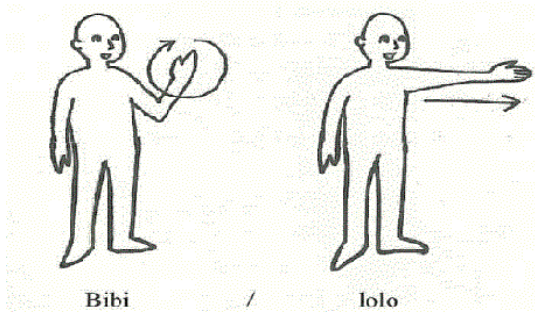
1- Qui la / console  
 2- A coups de / casserole,  
 3- Qui la / guérit

3 クロード・ロベルジュ、寺尾いづみ、身体の動きでことばを学ぶー50年間フランス語を日本で教えて、SOPHIA LINGUISTICA 63, 2015.

4- A coups de / fusil.

このわらべうたは、1行に強拍が二つあり、4行からなる起承転結が2セットとなっている。

学生が名付けた「Méthode Bibi Lolo」の身体の動きを下図に示す。



「Méthode Bibi Lolo」の身体の動き

次の(3)はフランスの数え歌で、子供が数字を覚えるときによく歌われ、音が繰り返し出てきて規則的な3拍子のリズムで調子のよいわらべうたである。

(3)

- 1- Une et une, la lune
- 2- Deux et deux, les yeux
- 3- Trois et trois, les rois
- 4- Quatre et quarter, la patte.

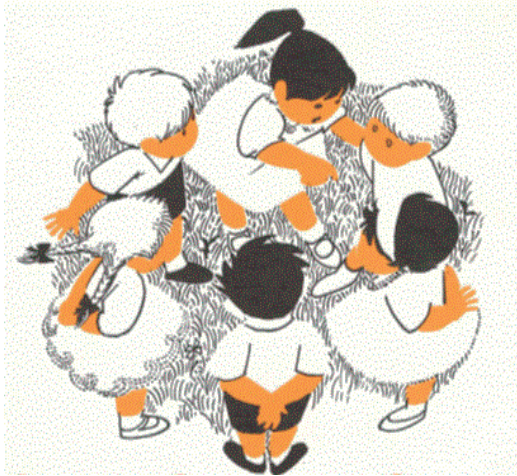
(4)のわらべうたは全く意味がないが、日本の「ずいずいずっころばし」のようなゲームの時に唄われるわらべうた<sup>4</sup>である。1行の全音節が強拍となる行では、強拍・弱拍が交互に現れて生まれるリズムがなさそうであ

4 Héléne Gauvenet, Une souris verte, COMPTINES RONDES JEUX CHANSONS POEMES, Illustrations de: P. NEVEU, DIDIER, 1965

るが、コンマで表わされる休止が弱拍と同じ役割を果たすことになる。

(4)

- 1- Am, stram, gram
- 2- Pic et pic et colegram
- 3- Bour et bour et ratatam
- 4- Am, stram, gram.



ナーサリーライム（わらべうた）は、日本語に翻訳せずに、リズムを優先し身体の動作を忘れないようにしながら繰り返すことが肝要である。わらべうたがもつ脚韻とリズムにより記憶しやすく、学習者は教室を離れても自ら練習することができることから効果があると云える。

### 3.2. メロディーのあるわらべうた（シャンソン）

シャンソンの場合のアクセント、発音は普通の文とは異なるが、手遊びや決まった動作を伴って唄われるわらべうた（シャンソン）は、身体の動きを通してフランス語のリズムを自然な形で習得できるものが多く、古くから唄い継がれ親しまれてきたシャンソン<sup>5</sup> (5) ~ (8) には、話し言葉

5 Odile Trémoureaux-Kolp, Le chemin des comptines, Dossier Ecole 2000, LABOR

で自然にアクセントが置かれるリズムグループ末の音節が長い音符に相当し、脚韻や歌詞の繰り返しがありフランス語らしいリズムを感じ取る効果がある。

(5)

- 1- Alouette, gentille alouette
- 2- Alouette, je te plumerai.
- 3- Je te plumerai le bec,
- 4- Je te plumerai le bec,
- 5- Et le bec, et le bec, Ah!
- 6- Alouette, alouette, Ah!

- 3- Je te plumerai la tête (bis)
  - 5- Et le bec (bis)
  - 6- Alouette (bis) Ah!
- etc

上記のシャンソンは各行の番号順に唄うようにする。

(6)

- 1- Savez-vous planter les choux
- 2- A la mode, à la mode,
- 3- Savez-vous planter les choux
- 4- A la mode de chez nous?

- 1- On les plante avec le pied
  - 2- A la mode, à la mode,
  - 3- On les plante avec le pied
  - 4- A la mode de chez nous.
- etc

(7)のシャンソンは、1クラスを4グループに分け、番号付けされたグループに順番ごと発音させることにより、グループ間のフランス語の発音に係わる競争意識を高めることができ教育効果がある。



(7)

- 1- Jean petit qui danse, (bis)
- 2- de son doigt il danse, (bis)
- 3- de son doigt, doigt, doigt,
- 4- ainsi danse Jean Petit.

*Jean Petit*



Jean Pe - tit qui dan - se, Jean Pe - tit qui dan - se, A - vec le doigt, il  
 dan - se, A - vec le doigt, il dan - se, A - vec le doigt,  
 doigt, doigt, A - doigt, doigt, Ain - si dan - se Jean pe - tit.

(8)

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| Frère Jacques      | Frère Jacques      |
| Dormez-vous ?      | Dormez-vous ?      |
| Sonnez les matines | Sonnez les matines |
| Ding din don       | Ding din don.      |

広く知られている Frère Jacques は学習者を 4 つのグループに分け輪唱して楽しむことができる。

### 3.3. 絵本を使った日常会話の学習

ナーサリーライム（わらべうた）で体得したリズムを、普通のフランス語を話す時にも使えるようにするための橋渡しとして、日常の会話で用いられるような平易な文を徐々に長くしながら身体の動きとともに発話する方法がある。

ここでは、フランスの絵本<sup>6</sup>を見ながら、日常よく使われる言葉を適切

6 Les comptines des Petits cousins(Francais/Anglais), Didier, 1997

な動作とともに繰り返すことによって、リズムとイントネーションの学習方法を紹介する。

(9) は、動物の鳴き声を発音し、フランス語のリズム感を習得する。

(9)

- 1- Cot, cot
- 2- Dit la poule
- 3- Cui, cui,
- 4- Dit l'oiseau
- 5- Miaw, miaw
- 6- Dit le chat
- 7- Ouaw, ouaw
- 8- Dit le chien.
- 9- Et moi ...
- 10- Je n' dis rien.



(10) は脚韻を踏んだ4行が1節をなし、3節からなる長めのわらべうたである。第1節のみ1・2行目の脚韻の不揃いは、この部分だけ史実に基づいているため人名・地名を勝手に変更できないからである。2・3節目では、脚韻とリズムのために人名や地名が選ばれている。

(10)

- 1- Alexandre le Grand,
- 2- Roi de Macédoine,
- 3- Avait un cheval
- 4- Nommé Bucéphale.

- 1- Alexandre le Petit,
- 2- Roi de Sibérie,
- 3- Avait une souris,
- 4- Nommée Biribiri.

- 1- Alexandre le Gros,
- 2- Roi de Monaco,
- 3- Avait un Chameau,
- 4- Nommé Rococo.

次は擬音語で大変リズムカルで覚えやすいわらべうたである。

(11)

- 1- Mes p'tites mains font
- 2- Tap, tap, tap
- 3- Mes p'tites pieds font
- 4- Paf, paf, paf

- 1- Un, deux, trois
- 2- Un, deux, trois
- 3- Trois p'tits tours
- 4- Puis s'en va.

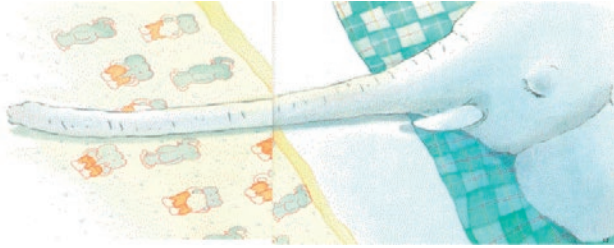
童話の絵を使い、動物の動作を繰り返し発音させることにより楽しく習得できる。

(12)

- 1- L' éléphant, (bis)
- 2- il se douche, douche, douche, (bis)
- 3- sa trompe est un arrosoir. (bis)

- 1- L' éléphant, (bis)
- 2- il se mouche, mouche, mouche, (bis)
- 3- il lui faut un grand, grand, grand mouchoir. (bis)

- 1- L' éléphant, (bis)
- 2- il se couche, couche, couche, (bis)
- 3- à huit heures tous, tous, tous les soirs. (bis)



#### 4. 字のない絵本を使った会話の学習

筆者・小川・河野が子供に英語を教えるために作成した絵本<sup>7</sup>（ロベ先生とはじめての英語）には、各章のタイトル以外いっさい文字を使っていないので、フランス語の学習教材としても使える。

筆者は、この教材を使って小学校低学年までの児童4名にフランス語を教えた経験がある。児童らはそれまでフランス語の学習経験はなく、週1回、1時間半ほどのレッスンの他は、絵本は家に持ち帰らず、家庭や学校でフランス語に触れる機会は皆無であった。レッスンでは日本語での説明は一切せず、ただ絵本を見せて、絵を指さしながら言葉を聴かせ、同じ言葉を繰り返えさせるだけであった。幼児教育の基本である誤りを指摘することや叱責することは一切しなかった。1年ほどで彼らは導入2章、本編17章の全てのページを誦んじることができた。引続きレッスンを続けたとの意向があり、同じ絵本を使って言葉を入れ替える、クイズに答えさせるレッスンをさらに1年半楽しんで続けた。

小学校低学年までの年齢であれば、声を出しながら自然に身体が動くため、ナーサリーライム（わらべうた）のリズムを体感させる身体の動作をわざわざさせる必要がなく、きわめて自然なフランス語のリズムとイント

<sup>7</sup> クロード・ロベルジュ、小川裕花、河野万里子、ロベ先生とはじめてのえいご (mommy's English Method)、小峰書店、2010。

ネーション、正確な発音が身につくことがわかった。

子どもに対する指導では、特に留意すべき点がある。第一に、絵を見せ前回までに覚えた語句から始めるなどして、既知の情報からくる安心感を常に与えること。第二に、繰り返しを厭わないこと。リズムが快ければ、子供は繰り返しを苦にせず、むしろ楽しい遊びと捉える。さらに、自由な動きを禁ずる、強圧的・一方的な指導をしないことが肝要である。笑ったり楽しんだりしながら自発的に動けば、どのような動きであっても子供はあらゆる言語の自然なリズムを身につける能力を備えている。

「ロベ先生とはじめての英語」の絵本を使ったフランス語版の例を以下に示す。

(1)



- 1- Moi.
- 2- Moi et Maman.
- 3- Moi et Papa.
- 4- Moi et Maman et Papa.
- 5- Moi et le chien.
- 6- Moi et Maman et Papa et le chien.
- 7- Moi et le chat.
- 8- Moi et Maman et Papa et le chien et chat!

14 クロード・ロベルジュ

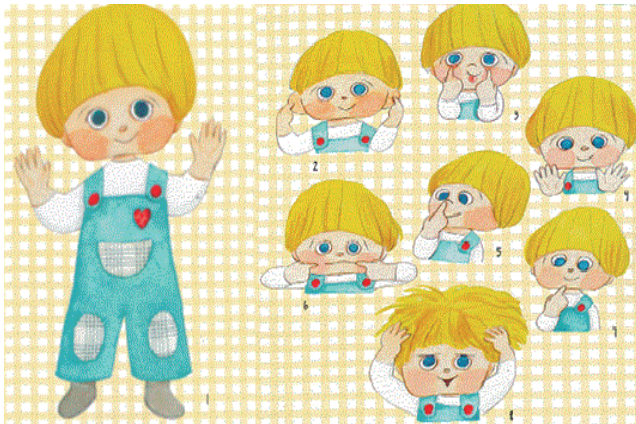
- 5- Le gros chien
- Le petit chien
- Le moyen chiet.

- 7- Le gros chat
- Le petit chat
- Le moyen chat.

ある期間を経ってから課題を替えて同じ絵を使って以下の言葉を覚えさせる。

- 1- Toi
- 2- Toi et ta maman
- 3- Toi et ton papa
- 4- Toi et ta Maman et ton Papa

(2)



- 1- J'ai
- 2- deux
- 3- oreilles,
- 4- deux yeux,

5- deux mains,

6- mains

7- un nez,

8- une bouche

9- un menton

10- etc

11- beaucoup, beaucoup, beaucoup, beaucoup de cheveux.

-J'ai deux pieds

coudes

jambes

-J'ai une tête

un petit, petit coeur.

ある時期経ってから課題を替えて覚えさせる。

1- Toi as etc

2- Maman a etc

3- Papa a etc

(3)



- 1- Madame la banana  
et ses enfants
- 2- Madame la pomme  
et ses enfants
- 3- Madame la cerise  
et ses enfants
- 4- Madame la pêche  
et ses enfants
- 5- La famille des poissons  
le papa, la maman  
et les enfants
- 6- La famille des nuages  
le papa, la maman  
et les enfantse
- 7- La famill des bouteilles  
le papa, la maman  
et les enfantse
- 8- Madame la voiture  
et son enfants.

ある時期経ってから課題を替えて覚えさせる。

- Madame la banana  
a combien d'enfants etc
- Dans la famille des poissons,  
il y a combine d'enfants ? etc
- Qui a deux enfants ?  
Qui a trois enfants ?
- Dams la famille des poissons,  
il y a combine d'enfants ? etc
- Qui a le plus d'enfants ?  
Qui a le moins d'enfants ? etc



## 5. まとめ

筆者は、筆者の母 Mariette Lacombe Roberge からいろいろな場面を見せられて、単語そのものよりも、ことばのリズム・イントネーション・休止を母親の顔の表情や身振りから感じさせられ、フランス語を養った。1967年3月、フランス語教育の準備をしている時に母親の真似をしたらいいのではと思い、実際に真似てみると身振りがフランス語のリズムと合致していることに気付いた。このことは、日本語、ポルトガル語など他言語でも同じことであり、幼児の言語学習は、母親が幼児をあやす時、子守歌を唄う時の身体の動き、リズム、言葉の上下、イントネーション、静かさ、から自然に身についてくる。即ち、このことは言語教育の根本が母親からのリズム・動きから伝わっていることを示すものである。

筆者は、50年の間、生徒には理論よりもグベリナ教授のことばである「Sound comes from movement」<sup>8</sup>をフランス語教育に適用し、フランス語のリズム・イントネーションをもっている「Bibi lolo」などのわらべうたを使って身振りによりフランス語学科新入生のフランス語の教育をしてきた。

この50年間の研究成果として以下の結論を得ることができた。

1. フランス語は動きから生まれている。
2. その動きは、人間の身体から生じられている。
3. その動きは、特にフランス語のわらべうた（ナーサリーライム）から生まれている。即ち、その動きはリズムとイントネーションから出てくる。
4. 手の動きでフランス語のリズム・イントネーションが現れてくる。
5. これまでの段階を経て自然な流れとして、上下の動き（音の上下）からフランス語のリズム・イントネーションを覚えられる。特別な訓練をせずに自然の流れとして発音と動きは連携する。
6. 一般に、他の外国語も上下の動きで表わすことが可能である。
7. グベリナ教授が示唆した「l'optimale」については今後検討する予定である。

8 ベタール・グベリナ著、クロード・ロベルジュ編、ことばと人間 聴覚リハビリと外国語教育のための言語理論、上智大学出版、2012。

筆者は、40年近くの友人である静岡理工科大学総合技術研究所 安昭八客員教授と奥様 安 芳子氏に、本書作成の助力をいただいたことに感謝する。